「道徳教育論」における実践的指導力育成の取り組み
― 模擬授業を通して ―

高瀬 幸恵

キーワード：道徳教育、道徳の時間、実践的指導力、模擬授業

概要

筆者が担当した教職課程における「道徳教育論」の授業において、学生に模擬授業を課す試みを行った。その教育実践の記録を報告する。

中学校における道徳の時間を運営するにあたっては、単なる授業展開の手法だけでなく、人権問題、環境問題、国際問題など、社会のなかの様々な側面に対する深い理解や見識が求められる。そうした道徳の時間の実施上の難しさや必要とされる慎重さを、模擬授業を通して学ぼうとするのが、本授業のねらいであった。

模擬授業を行うなかで学生達は多くの困難にぶつかった。その一つは指導計画の立案とその実施である。自分が予想しなかった反応や質問が出されて対応に困惑し、また、ホワイトボードへの記入や受講者への説明などの技術不足という道徳教育に限らない授業実施上の問題が現れた。また別の困難として、道徳教育独自の難しさにもぶつかった。定められた教材がないなかで、どのような教材を使用するのか、その選択から学生は悩んだ。価値を教えることの難しさを実感した学生もいた。障害を扱ったテーマ設定をした学生は、受講者に問いかける設問の内容が、異なる価値観を受けとめきれないものとなってしまった。

道徳の時間の模擬授業という実践を通して、学生達は道徳教育の難しさの壁にぶつかり、価値を教えることの難しさや、指導者の価値観の寛容さの必要性を感じたのではないだろうか。ただし、大きな課題として明確になったのは、今後指導者となっていく学生達に対して、どのように価値観の広さ･深さを身に付けていってもらうのか、ということである。

はじめに

2008年に改訂された中学校学習指導要領における道徳教育の基本方針は、大きく3つにまとめられている。第一に道徳性の育成を重視すること、第二に道徳の時間のより効果的な教育のために、小中学校では指導の重点や特色を明確にすること、第三に道徳教育の推進体制等の充実を図ることである（『平成20年度改訂中学校教育課程講座　道徳』）。第二点目については、道徳の時間における指導が形式化して実行が上がっていないなどの指摘を受けたものであり、道徳教育の指導の改善が求められている背景がある。

現在、一般的に効果的な道徳の時間における指導方法のポイントとされているのは、生徒の主体性を重視すること、そして指導者の資質や姿勢である。例えば塚野征（『新しい道徳教育の進め方』）によれば、指導方法の活用に際して留意することとして、「子どもの自由な発言、率直に自分を語ることができる指導方法であること」、「授業のねらいや価値の押しつけによって、子どもが受け身の立場に追い込まれないようにすること」、「指導者の個性や持ち味を生かす指導方法であること」の3点を挙げている。子どもの主体性に加え、指導者の個性を活かすという視点が興味深い。また、高橋喜代治（柴田義松編『道徳の指導　改訂版』）は、道徳の授業を意義あるものにするために欠かせないものとして、民主的な学級づくりを挙げると同時に、「道徳的価値探求の同伴者」としての教師の姿勢を重視している。指導者も完成された人間ではなく、葛藤し、悩み、自己変革する同伴者であることによって、「こうあるべき」という徳目の一方的な押し付けを回避することができ、多様で寛容な道徳性を生み出すことができる、としている。

高橋の議論のなかには、単なる指導技術を超えた道徳教育の困難さを受けとめた指導者の姿勢を見ることができる。すなわち、道徳的価値は絶対的なものではなく、指導者も絶対的な答えを生徒に示すことはできず、児童・生徒と共に葛藤し、悩むのである。この指導者がねらいとしているのは、児童・生徒が様々な価値を受けとめられる寛容な道徳性を身に付けることである。こうした価値を教えることの難しさは、学校における教科指導とは異なる道徳教育固有の問題ととらえることができるであろう。

このように見てくると、まずは価値教育の困難を知ることが、道徳教育を指導するための実践的指導力の基礎であると考えることができる。大学での教職課程において、こうした道徳教育における困難を学生にどのように伝えるべきであろうか。この課題に対する一つの取り組みとして、筆者が担当する「道徳教育論」の授業において、道徳の時間の指導計画の立案と模擬授業を学生に実践させることを行った。価値の教育を実践することで、学生たちがこうした困難にぶつかり、その問題に気づくことができるのかに着目した。以下、授業の概要と模擬授業での学生の実践を紹介した後、模擬授業を経験した後の学生たちの感想からこの問題を分析することとする。

1．授業の概要

本科目の受講者は17名で、そのうち1名が4年生、17名が2年生であった。全15回の授業においては、学生自身が受けた道徳教育の振り返りや、授業実践のビデオ視聴のほか、道徳教育の歴史の学習を行った上で、現行の学習指導要領で道徳の時間がどのように定められているのか、その位置づけ、指導内容について学んだ。

授業実践のビデオ教材は、2006年11月14日にNHKで放送されたクローズアップ現代「“愛国心”って何ですか」である。この番組では、二つの公立小学校で6年生を対象とした愛国心教育の実践を紹介している。第一の実践例は、日本の四季に着目した内容で、異なる季節の富士山の写真を教材として使用し、日本の四季の美しさを児童に伝えるものであった。教員は、限られた時間のなかではある程度の価値観を提示する必要があるとの考えから、日本は美しいという価値観を児童に伝えることをねらいとしていた。第二の実践例は、第一の実践例とは異なり、愛国心は一定の価値観を示して教えるものではないとし、国を愛する心は日本の伝統文化を深く知ることで自然に育つものとの考えを持っている教員によるものである。こうした考えに基づき、箸を教材とし、その使い方やマナーについて詳しく学び、なぜそのようなマナーがあるのかについてグループで児童に考えさせるという内容であった。

このビデオを見た後で、内容やポイントについて整理を行い、加えて昨年度本講義を受講した学生の模擬授業の例を紹介した。その学生は環境問題をテーマに模擬授業を行い、富士山が入山者の持ち込んだごみで汚されており、世界遺産に登録されなかったという現状を取り上げながら、自然を愛護する心の育成を第一のねらいとし、その延長として愛国心の育成につながれば、という願いを込めて授業を計画した。この学生の取り組みはビデオでみた第一の実践例での価値の教育を批判的にとらえ、自分なりに乗り越えようとするものであった。

こうしたビデオ教材や学生の取り組みの実例を用いて、これから学生達が模擬授業を行うにあたってぶつかるであろう壁（価値の教育がはらむ問題性や困難）を伏線的に伝えた。

模擬授業を行うにあたっては、本来であれば全員が個人発表することが望ましいが、時間の制約もあり、2～3名のグループでの指導計画の作成・発表とした。模擬授業の指導計画の作成や実施に先立って、授業の実践例を複数示し、導入・展開・終末の授業構成の工夫や、対象とする生徒の学年、学期などを踏まえることなどを示した。また、取り扱うテーマは学習指導要領に示されたものの中から選択し設定することとした。グループに分かれての指導計画の作成には授業2回分を使い、学生自身が用意した教材等に基づいて計画を立て、所定の用紙に記入する作業を行った。

実際の発表は、1グループにつき30分を持ち時間とし、指導計画に基づいた授業計画

の紹介（5分）、授業計画の部分的実施（25分）を行い、発表にあたって指導計画、教材等を受講者の人数分用意して配布するようにした。発表を見る側の学生には感想記入用紙を教員から配布し、記入してもらった。この用紙には、①使用した教材等はどうだったか。②授業の展開方法はどうだったか。③プレゼンテーションの技術はどうだったか。④工夫や改善が必要だと思う点、という項目を設定した。他のグループの発表を分析するための視点を提示するためである。このような手順で、7グループの発表を4回の授業に渡って行った。

2．模擬授業での学生の取り組み

学生が行った発表の内容は以下の通りである。

- Aグループ（2名）：テーマは地球温暖化について考える。温暖化についてホワイトボードに記入しながら説明した後、アニメーション映画（「つみきのいえ」）を使用した。途中クイズを設けるなど工夫した。映画の視聴後はグループに分かれ、自分たちにできることは何かを考えるという計画であった。
- Bグループ（3名）：テーマは規則正しい生活。円グラフに自分の24時間の生活を記入させ、自分の生活を振り返り、反省する。その後、理想の生活の円グラフを示し、どこが異なるのか、自分の生活の問題点は何かをワークシートを使用しながら考えさせる。終末では、規則正しい生活の必要性を教師が説くという計画であった。
- Cグループ（3名）：テーマは食べ物を通して、命のあり方・大切さ、食べ物のありがたみを理解する。導入では、「昨日の夕飯は何だったか？」という問いかけを設けるなど工夫した。食肉がどのような過程を経て食卓にのぼるのか、映画『いのちの食べ方』を通して学ぶ内容であった。
- Dグループ（2名）：テーマは目標に向かってあきらめず、全力で取り組む。漫画のスラムダンクを用いた。導入では「現在目標を持っている人はいますか？」と問いかけるなど工夫をした。展開では、漫画の主人公の努力とその結果をホワイトボードに書きながら説明するとともに、漫画の重要な台詞をあらかじめ消しておき、何が入るか考えさせた。
- Eグループ（3名）：テーマは自己分析によって新しい自分を発見・再確認する。エゴグラム自己診断テストを用い、自己分析を通して他者の理解を深めることをねらいとした。エゴグラムの結果をホワイトボードに記入させ、全員の結果がそろったところで、その説明を行った。その後同じ結果に属する者で集まり、共通

する性格について話し合い、発表する内容であった。

- Ｆグループ（2名）：テーマは障害者への偏見や差別をなくし、より深く障害者を理解する。乙武洋匡さんの半生を教材とした。乙武さんの経歴について紹介した後、「この人物が幸せだと思いますか？それとも不幸だと思いますか？」という問いかけをした。その後、乙武さんがどのような社会生活をしてきたのかいくつかのエピソードを紹介し、充実した生活を送ってきたことを伝える。最後に「今日の授業を通して、障害者に対する考え方が少し変わったか？」という問いかけをする。
- Ｇグループ（2名）：テーマは周りの人を大切にし、感謝しよう。京谷和幸さんの半生を教材とした。導入では「最近両親や友人、先生といった自分の身近にいる人に感謝の気持ちを伝えましたか？」という問いかけを行う。次にプロサッカー選手として活躍中に事故に遭い、車椅子バスケットボールの選手となった京谷さんの経歴を紹介する。その後、「もし自分が今事故で車椅子生活になったらどう思うか？」などの問いかけを交えながら、周りの人々に支えられて京谷さんが車椅子バスケットボールの日本代表選手となっていくことを伝える。

それぞれのグループが個性的で工夫を凝らした発表であった。特に、価値の教育という視点から見た場合、ＦグループとＧグループの事例は大変興味深い。障害をテーマに設定することは多くの経験を積んだ教員にとっても難しいことであろう。当然、学生にとっては非常に高いハードルとなった。

Ｆグループの場合、「この人物が幸せだと思いますか？それとも不幸だと思いますか？」という問いかけを行い、どちらだと思うか挙手させた。この時、ほとんどの学生が「幸せだと思う」に手を挙げたが、どちらにも挙手しない学生がいた。教員役の学生は、そのことに気づかないまま授業を進めようとしたので、その場で「なぜ手を挙げなかったのか聞く様に」とアドバイスをした。そうすると挙手しなかった学生は、「障害を持つ、持たないに関係なく、他人が幸せか不幸か自分には判断することができない」と答えた。こういった考えはＦグループの学生にとって想定外のもので、この考えを充分に受けとめることができなかった。模擬授業終了後、発表を聞いた他の学生の感想では、「障害者について、とりあげる事は、とても重く難しい内容だったと思うし、この内容をとりあげるのならば、質問や内容を変えるべきだと感じました。〔中略〕全面的に『障害者』ということをあらわにし過ぎているような感じがしました」というものも見られた。価値を教える者に求められる価値観の広さ･深さを改めて知らされる実践となり、Ｆグループの学生のみならず、受講者にも強い印象を与えたと思われる。Ｆグループの一人は発表を行った感想を次のように述べている。「他の人に自分の言いたいことを伝えるというのは、とても難しいこと

だと実感しました。また、意見をもらう時に、自分が予想もしなかった意見が返ってくると焦ってしまったので、もっと広く考えてどんな意見が出るのかを想定しておかなければいけないと感じました。」

このＦグループの発表の翌週に行われたＧグループは、障害を持つスポーツ選手を取り上げる内容の発表であったため、Ｆグループの反省点を活かそうとするものとなった。Ｇグループの一人は発表後、次のような感想を書いている。「私達の発表では、『車椅子のＪリーガー』という１つの本をメインの題材として扱い、その本を熟読し、本の内容や京谷さんの伝えたいことというのを理解し、その中でどの部分を使えば中学生相手に伝わりやすいかということを深く考え追求しました」。Ｇグループが重視したのは、京谷さんの障害やその経歴よりも、京谷さんが伝えたいことが何かということであった。そのため、模擬授業を展開する上での中心的な柱は、京谷さんを支えた人々の姿であり、そうした人々に対する京谷さんの感謝の気持ちとなっていた。こうした発表を受けて、Ｆグループの一人の学生は、「自分達は障害者についてやったが、その主人公を障害者にするか、それとも周りの助けたり、支えてくれたりした人を主人公にするかで、全然違う授業になり、その辺りもよく考えてから授業を組み立てるべきだと感じた」と感想を述べており、Ｇグループの発表から学んだようであった。

これら障害を取り扱った模擬授業の実践の中で、価値の教育を行う上で指導者の価値観のあり方が重要な課題であることが明らかとなり、またこの課題を乗り越えようとした学生の取り組みを見ることができたと思う。学生たちが価値観の寛容さを今後いかに身に付けていくのかが残された大きな課題であろう。

３．学生の感想

最後の授業で、「自分が模擬授業を行ってみた感想」、「他の人の模擬授業を通して学んだこと」を書いてもらった。その内容の紹介と分析の後に、全員の感想を部分的に省略しながら掲載するので参照されたい。補講であったため、この回の出席人数は11名と少なかった。個人名は伏せ、アルファベットの小文字での表記とした。また、「２．模擬授業での学生の取り組み」と「３．学生の感想」で引用した部分についてはアンダーラインを付した。

①「自分が模擬授業を行ってみた感想」について

自分が模擬授業を行ってみることによって、第一に道徳の時間の授業固有の問題を実感した学生が複数いたことが分かる。例えばｂさんは、「取り上げたテーマを通して生徒に考えさせ、それを自分達の価値観に役立たせることが、道徳の授業の目的なのでは、と思

った。一方的に伝えるだけではいけない、ということを痛感した」と考えており、他者の価値観に触れさせることが道徳の授業で重要であることを感じ取っている。また、c さんについては、「専門の教科と違い、道徳では教材の選択から始まり、目的や授業の展開など多くの選択すべきことがあり、自分の望むような授業案を作ることが難しかった」と記しており、教科書という基礎的な教材が存在しない道徳の授業を作ることの難しさを理解できている。道徳の授業における実践上の困難については d さんも記している。d さんは愛国心を教えるということを例に挙げながら、「道徳には教えるべき事柄が多く、教師側の固定観念のみで授業を進行させてしまうと、生徒個々人に影響を与えすぎてしまう恐れがあることも学びました」として、指導者による価値の提示の危うさに気づくことが出来た。

第二に道徳教育の問題に限らず、一般的に授業を行う上で学んだことも多く記されている。a さんは、「生徒が何を理解して考えるか」が授業計画を立てる上で重要であることを学びとり、「教師は常に生徒のことを考えて授業計画を作らなければならないことを実感した」と記している。d さんも同様の気づきがあったようで、「プランを考える上で、生徒の興味や関心を想像することが重要な意味を持つことを知りました。教師側の観点のみで、教材を選択してしまった場合、生徒にはただ退屈な授業に映ってしまい、彼らにとって何のプラスにもならない、と改めて思いました」と感想を述べている。教材の選択だけではなく、それをどう活かすかという問題に触れているのが f さんで、「エゴグラムという資料だけでは学生でもできます。何をプラスアルファして授業にするか、教師はこういったことで日々悩んでいるのかなと思いました」としている。また、指導計画を立てるには、実践で得る経験値が必要と感じたと e さんは記している。授業実践の技術については、g さんは声のトーン、話し方、目線について配慮したことに触れており、j さんはホワイトボードの文字の書き方を反省している。

②「他の人の模擬授業を通して学んだこと」について

他の学生の発表を見て、道徳教育に限らない授業実践の技術について学んだ学生が多かったようである。b さんは、「しっかり準備をして授業をいかにスムーズにまたメリハリをつけて進められるか否かで生徒の反応や集中は変わってくる」ことを学んだ。準備の重要性に加え、「生徒側に動きを持たせる」という授業形態の重要性について記述しているのは d さんである。また、授業を進行する上でのメリハリや説明の簡潔さ、声のトーンが大事であることについては、g さんと i さんが触れている。興味深いのは e さんの感想である。e さんは、他の上手い発表をしたグループを見て、「自分に足りないものが他にもあるように」感じるが、それは授業実践の技術だけの問題ではないととらえている。「例えば、先生としての自覚だったりがそれで、自分は気持ち的にも“先生”になりきることができなかったんだ、と思いました」と記述した。さらに、道徳の時間の授業運営では教

員の資質が重要であることに以下のように触れている。「ましてや、道徳の授業で、教科ではない、テストもないクラスでは先生が授業をコントロールする力というのはとても重要だと思います」。このように、模擬授業を自分が実践するだけではなく、他の学生の実践を見ることで、学生達は多くのことを学び取ったようだ。

《自分が模擬授業を行ってみた感想》

aさん:実際に自分がやってみて、最も難しかったのは授業計画である。計画を立てる時、最初に何からやっていいのか分からず、とても苦労した。どのような教材を扱えばいいのか、何をテーマにすればいいのか、模擬授業の経験がほとんどない私にとっては非常に難しかった。ただ結論として私が計画を立てる上で一番大切であると考えたのは、「教師が何をするかではなく、生徒が何を理解して考えるか」ということである。教師は常に生徒のことを考えて授業計画を作らなければならないことを実感した。

bさん：模擬授業をやってみての感想は、道徳という授業の中で、何をテーマにあげ、そしてどういった形・内容で生徒に伝えていくのか、一番考えさせられた。自分が知った知識を一方的に伝えた所で、本当に分かってほしい事は生徒には伝わらないと思う。取り上げたテーマを通して生徒に考えさせ、それを自分達の価値観に役立たせることが、道徳の授業の目的なのでは、と思った。一方的に伝えるだけではいけない、ということを痛感した。

cさん：自分は、実際には授業〔教員役のこと：筆者注〕をしなかったが、教材や目的を選ぶのが大変だと感じた。専門の教科と違い、道徳では教材の選択から始まり、目的や授業の展開など多くの選択すべきことがあり、自分の望むような授業案を作ることが難しかった。生徒に興味を持たせることは教材の選択によっては簡単であるが、集中力を持続させる為にはプレゼンテーションの技術が大切である。又、どんなに素晴らしい内容でも展開の方法などが悪ければ、生徒達の学習にはならない。授業は全てをしっかりとした内容でできなくては成り立たないと感じた。

dさん：自分で授業を組み立てることがこんなに困難だと思っていなかったというのが率直な感想です。また、プランを考える上で、生徒の興味や関心を想像することが重要な意味を持つことを知りました。教師側の観点のみで、教材を選択してしまった場合、生徒にはただ退屈な授業に映ってしまい、彼らにとって何のプラスにもならない、と改めて思いました。彼らの関心から離れず、かつ心の成長の一つのきっかけとなる教材を常に持つべきであると考えました。また、道徳には教えるべき事柄が多く、教師側の固定観念のみで授業を進行させてしまうと、生徒個々人に影響を与えすぎてしまう恐れがあることも学びました。例えば愛国心ですが、教師が「日本の良いところはここである」「日本を愛そう」といって「ここが良いんだ」となる生徒もいるかもしれない。また、逆に

「そんなことない。日本は良い国ではない。」と納得しないこともあるかもしれない。このように生徒のもつそれぞれの意見や個性をつぶすことなく、授業をしなければならない所が、道徳授業の難しい所であると思いました。

e さん：指導案作りと実践のギャップにショックをうけました。机上で自分のイマジネーションを駆使して実践を想像するも所々で誤差が生じ、指導案のズレができ、そのできたズレが段々と広くなっていくようでした。指導案というのは、実践をやることで得る経験値みたいなものが必要のように感じました。

f さん：まず、何をテーマに授業をするかを決めるのにすごく時間がかかりました。色々な教職の授業をふまえて「生徒参加型」の授業がいいなと思い、エゴグラムにしたのですが、やって結果的に何が言いたいのか、やるだけではなくそこからどう発展させるのかと考えるのがとてもむずかしく頭を悩ませました。エゴグラムという資料だけでは学生でもできます。何をプラスアルファして授業にするか、教師はこういったことで日々悩んでいるのかなと思いました。〔中略〕１つの授業でもこんなに準備が大変で、それでもたりない、教師ってあらためて大変だなと思いました。

g さん：模擬授業では、先生役としてやったので声のトーンや話し方、目線に気をつけて行いました。この意識が皆にも伝わって、周りが見えていたとか、落ち着いていたということを言われたのがとても良かったと思います。授業を展開する中での言葉遣いや話のもっていき方というのは本当に難しくて、発表の際もつまってしまうことがあったので、もっと経験を積みたいと思いました。苦労したことは、授業を構成する準備でした。何に焦点を置き、どのような展開で授業を進めていくのかということにとても時間がかかりました。そしてどうすれば伝わりやすいかを考えることが難しく大変でした。ただ、準備をしっかりできれば発表でつまずくことも減ることに改めて気づいたので、良い経験でした。

h さん：他の人に自分の言いたいことを伝えるというのは、とても難しいことだと実感しました。また、意見をもらう時に、自分が予想もしなかった意見が返ってくると焦ってしまったので、もっと広く考えてどんな意見が出るのかを想定しておかなければいけないと感じました。全体的には、少し準備不足だったと思うので、もっとうまくまとめて、何をテーマとし、考えてもらいたいのかを、わかりやすく説明するようにしていかないといけないと思いました。

i さん：私は最初に説明をするだけで、あとはパートナーのバックアップをしました。バックアップも発表の流れを理解し、次にとるであろう行動を予測しながらやるというのがすごく難しかったと思います。私達の発表では、「車椅子のＪリーガー」という１つの本をメインの題材として扱い、その本を熟読し、本の内容や京谷さんの伝えたいことというのを理解し、その中でどの部分を使えば中学生相手に伝わりやすいかということ

を深く考え追求しました。特に導入の部分ではどのようにすれば生徒達が興味を持つかということで写真を出し、3択のクイズにするなど対象を考えながらできたと思います。対象に対して授業を組み立てるというのが一番難しく、最も勉強になった部分だと思っています。

j さん：準備するモノを揃えることに時間がかかってしまったけれど「エゴグラム」という言葉や意味、どんな結果が出るのかを楽しみながらやれるモノだと思いました。自分自身の性格についてよく知ることで得意･不得意なコトが理解でき、挑戦してみようと、やってみようという目標を定めていって欲しいと思いました。実際、白板に書く字の大きさやキレイさがあまり良くなかったと反省をしたので、誰が見ても分かる字を書けるように努力していきたいです。

k さん：実際にやってみるとたった30分間だけだったのにとても難しかったと思った。まず、どんな事をやるかという教材選びにも苦戦し、どんな事を生徒に伝えていくのか、どのようにすればうまく伝わるのかということを必死に考えてみたが、なかなかいい案が出てこず、大変であった。自分は発表〔教員役のこと:筆者注〕はしていないのだが、質問した答えに臨機応変に対応しなくてはいけないし、授業するのには、あらゆる事を想定しておかなければならないという事に気づかされた。また自分が中学生の頃は、先生のこのような道徳の授業の時はたいてい寝てしまっていたので、こんな頑張って考えてくれた授業を聞かなくて申し訳ないという気分に今さらなった。

《他の人の模擬授業を通して学んだこと》

a さん：他のグループを見て、私が模擬授業する上で重要であると気がついたのは、「教師が元気良く、楽しそうに授業をする」ということである。非常に初歩的なことかもしれないが、対象中学生ということを考えると大切なことであると思う。教師が元気良く授業をしないと、生徒も授業に対する意欲が沸かないのではないか。勉強したり、学んだりすることにおいても、つまらないより楽しい方がお互いにとって、とても嬉しいことである。それはあくまで､ふざけるという意味ではない。授業を楽しむということは、生徒の関心・意欲を最大限にする環境となることを、私は他のグループの発表を見て学んだ。

b さん：他の人の模擬授業を見て感じたことは、しっかりと準備がされているほど授業がスムーズで、伝えたい内容が分かりやすかった。授業にあきさせない工夫や集中を切れさせない工夫を各班考えていて、それも勉強になった。道徳の授業に限らず、全ての授業で言えることだが、しっかり準備をして授業をいかにスムーズにまたメリハリをつけて進められるか否かで生徒の反応や集中は変わってくる。そこをいかに工夫するかも大切だと思った。

dさん:今回、他の人がやっている授業を見て生徒が質問しそうなことをしっかりと調べ、発言されたときには正確な情報を伝えられる準備をしておくことが道徳授業においても不可欠だと思いました。また、自分自身は道徳の本を読んでクラスで意見を言うという授業しか経験して来なかったのですが、形態も重要な意味をもつということがわかった。座学のみでは退屈してしまうものも、生徒側に動きを持たせることによって積極的に参加できることを学びました。

eさん：上手に授業を行う他のグループを見て、自分に足りないものが他にもあるように感じます。例えば、先生としての自覚だったりがそれで、自分は気持ち的にも“先生”になりきることができなかったんだ、と思いました。ましてや、道徳の授業で、教科ではない、テストもないクラスでは先生が授業をコントロールする力というのはとても重要だと思います。僕に道徳の授業を行った先生を今では思い出します。教員暦３年で若い先生でしたが、道徳の授業中は自分の昔話や面白い話などを織り交ぜ、頑張って子どもたちの関心を集めていたように思います。自分もあんな先生になりたいです。

fさん：みんなそんなお題をどこから見つけてきたの？！と驚かされました。グループによって授業の進め方も全然違うけど、みんなが一生懸命考えて自分たちなりの授業をしようというのがすごく伝わってきました。〔中略〕学んだことはやっぱり生徒に迷いをみせないということです。「えっ、これでいいんだっけ」とキョドってしまったりすると「なんかまちがえたんだなあ」とこちらにも伝わってしまってあまり良くないと思いました。今回の授業をふまえて、これから自分がどのような教師を目指していくのか考えたいと思います。

gさん：発表の仕方、話し方、立ち居振る舞いといったプレゼンテーション能力は見ないと学べないことだと思い、他の人の良いところをたくさん盗んで自分の力に加えられたと思います。特に、目線や話し方でその人がわかると発表を見て思いました。〔中略〕特に授業の中でのメリハリや説明を簡潔にすることが大切だと感じました。

hさん：他の人がやっているのを見て学んだことは、声の大きさやスピード、言葉遣いです。上手な人は、声一つで生徒を飽きさせないことができるのではと思いました。言葉遣いもキレイすぎては眠くなってしまうし、汚すぎても聞きたくなくなってしまうので、中学生相手に授業を行う時は、キレイと汚いの間の言葉遣いの方がうまくいくのではないかと感じました。他には、生徒に対し、ただ話しているようなのはダメだということで、私自身もそうなってしまっていたので、そうなってしまうと生徒の集中力も切れてしまい授業がうまく進まない事が起きてしまうかもしれない、なので常に生徒に質問や考えさせながら話すことも生徒の関心を高めるのに重要だと思いました。

iさん：皆いろんな工夫をしていてすごいと思いました。特にどの班も導入でつかむことがうまかったです。どの授業もとても身近なものですごく興味を持って参加することが

できました。そういった所から導入を大切にしようと考え、自分達の発表で、その学んだことを活かせたと思います。逆にそれを反面教師にしようと思ったこともありました。数人でしたが、声が小さくモゴモゴしていて聞き取りづらかったのが印象に残っています。すごく良い内容なのに発表のやり方であの様に印象を悪くしてしまうので、私達は声はハッキリということを意識してやれたと思います。他の班の発表を見ることによって良いこと学んだり、良くない部分は真似をしないといったお互いの発表能力の向上になったと思います。

j さん：生きる、食生活、障害者の理解、目標に向かっての努力といろいろな分野で模擬授業を体験してきて自分の知らなかったコト、新たに得たコトが沢山ありました。資料作成も工夫してやっていた班があったこと、分かりやすく説明されていたのが良かった。教室全体で、大きな声でハキハキと言えるように努力したいと思いました。

k さん：他の人達がやっているのを見て、最初に思ったのは、すごい落ち着いているなと思った。もし自分がやったとしたら、おそらくテンパってしまって、噛みまくったりすると思う。だからみんな冷静で堂々としていたのですごいなと思った。また、教材の使い方によって全く違う授業ができるんだなと思った。自分達は障害者についてやったが、その主人公を障害者にするか、それとも周りの助けたり、支えてくれたりした人を主人公にするかで、全然違う授業になり、その辺りもよく考えてから授業を組み立てるべきだと感じた。

おわりに

道徳の時間の模擬授業という実践を通して、学生達は道徳教育の難しさの壁にぶつかることとなった。また教員である筆者自身もその難しさを改めて実感することとなった。今回の取り組みにおいて、価値を教えることの難しさや、指導者には価値観の寛容さが必要であることを学生に知らせるというねらいは達成できたのではないかと考えている。こうしたねらいに限定するなら、道徳教育の実践的指導力の基礎作りに模擬授業は有効であるということができる。

ただし、大きな課題として明確になったのは、今後指導者となっていく学生達に対して、どのように価値観の広さ・深さを身に付けていってもらうのか、ということである。ここで求められる価値観は、人権問題、環境問題、国際問題など多岐にわたるものであろう。この課題は大学における教員養成課程だけで取り扱うべきものではないし、システマティックな課程に収まるものではないと思われるが、今後意識的な取り組みが行われる必要があると考える。

参考文献

文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説　道徳編』日本文教出版
辻野具成・塚野征（2006）『新しい道徳教育の進め方』学事出版株式会社
柴田義松編（2009）『道徳の指導　改訂版』学文社

学生に示した授業実践の事例は、以下のテレビ番組の映像と、文献に掲載されているものを使用した。
クローズアップ現代「“愛国心”って何ですか」NHK、2006 年 11 月 14 日放送
桃崎剛寿編（2003）『中学校編 とっておきの道徳授業―オリジナル実践 35 選 生き方・正義・行事・進路・社会に真っ向勝負（21 世紀の学校づくり）』日本標準
桃崎剛寿編（2004）『中学校編 とっておきの道徳授業〈2〉自立への第一歩 生命・法・悩み・進路・真実―続オリジナル実践 35 選（21 世紀の学校づくり）』日本標準
桃崎剛寿編（2005）『中学校編 とっておきの道徳授業〈3〉6 つの願いで創る 35 の道徳授業―命・正義・悩み・生き方・社会・そして愛（21 世紀の学校づくり）』日本標準